

## 発掘調査現場速報

### 浦廻遺跡 (白根市大字戸頭字浦廻4392ほか)

浦廻遺跡の発掘調査は、ほぼ終了に近づいています。今のところ、中世の湖沼地における人々の活動の跡ではないかと考えています。

遺跡では、大型土坑やたくさんの足跡が見つっています。建物跡などの生活に結びつく遺構は見つていませんが、人の足跡の検出から、当時の人々の活動範囲であったことは確かです。

遺物は、木製品を中心に骨もたくさん出土していますが、土器は一つも見つていません。木製品は、卒塔婆や呪術等の木簡、漆絵のある椀、下駄や扇子などが出土しています。木簡は、墨痕が薄くて読みとりづらいものも含めると、70点以上出土しています。骨はあちこちからバラバラと出土し、一個体まとまっていたの検出はありませんでした。

これからの調査・整理作業で、遺跡の性格をより明らかにしていきたいと考えています。 (本間克成)



子供の頭骨出土状況



木簡の出土状況

しもおききた  
**下沖北遺跡** (柏崎市大字下方字下沖38-1ほか)

前回の調査で確認されていた溝が、柱穴群や井戸等の遺構を方形に区画することが分かりました。このことから下沖北遺跡は、幅約2m、深さ1mの溝に方形に囲まれた居館であることが確認されました。新たに発掘された溝はほぼ南北を指し、調査初期に出土した東西溝と併せて、方位を意識しているようです。この区画溝は東西30m、南北60mを測ります。

また、南北溝の西側に二つの方形竪穴遺構が重複した状況で確認されました。西側の遺構は東西8m、南北5mの平面が長方形を呈するもので、覆土最下部には厚さ5cmほどの炭化物を多量に含んだ層がありました。この層からは土師質土器、皿、珠洲焼、甕、播鉢、壺、青磁、椀など完形に近い中世の遺物がまとめて出土しています。

その東側の遺構は主軸がやや東に傾くもので、一辺約5mの方形を呈しています。北側には浅い張り出しがついています。これは階段状を呈する入口と考えられます。こちらの遺構からの遺物出土量は前者の竪穴に比べ少なく、珠洲焼甕、播鉢、土師質土器皿、青磁椀の他に石鍋が出土しました。石鍋は滑石製で鍔が巡り、九州で制作されたものと考えられます。作りは丁寧で、遺物包含層出土のものと一緒に、今回の調査では3個体が確認されています。

(山本 肇)



遺跡の空撮写真



中世の陶磁器



柄杓



竪穴遺構遺物出土状況



石鍋



## みちばた 道端遺跡 (岩船郡荒川町大字南新保字道端97ほか)

4月末から始まった調査もいよいよ大詰めです。6月に終了した上層の調査では、古墳時代前期と後期の遺物が出土しました。注目すべきは、土師器に混じって縄を転がした土器が出土したことです。無文が一般的な古墳時代の土器のなかで、縄文を施し、文様を描くものは稀です。わずか数点ですが、異なる系統に属するこの土器の出土により、他地域の影響が道端遺跡に及んでいたことが分かります。

現在調査中の下層からは、縄文時代後期～晩期の遺物が多数出土しています。土器には流麗な文様を描いた鉢や壺、縄文を施しただけの深鉢、石器には石鏃・石匙・磨石などが見られます。遺跡のなかでも比較的高い場所に遺物の集中が認められることから、湿地のなかに浮かぶ島状微高地を舞台に、狩猟・漁労活動をおこなう縄文人の姿を想像してしまいます。  
(渡邊裕之)



縄文時代晩期の遺物集中ブロック



縄目のついた古墳時代?の土器

## しもわり 下割遺跡 (上越市大字米岡字下割1205ほか)

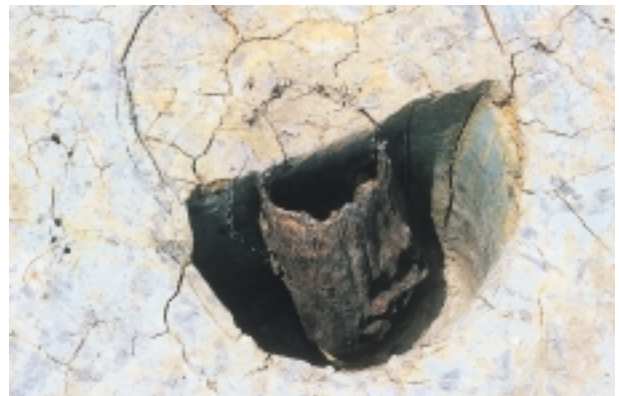
下割遺跡は上越市の東部、飯田川左岸に位置し、上越三和道路建設に伴い、4月から調査を行っています。調査の結果、遺跡の様相が徐々に分かってきました。

調査区の中央部からは一辺50～60mの溝(堀)が方形(ひし形)にめぐる屋敷跡が検出されました。時期は出土する珠洲焼から13世紀後半～14世紀が中心になるものと思われます。屋敷跡からは掘立柱建物跡や井戸などが確認できます。掘立柱建物跡の柱穴は、径70cmを超え柱根が残るものがある一方(写真)、径20cmほどの小さなものもあります。井戸も径1～3m、深さ1～2mとさまざまなものがあり、中から曲物や箸などの木製品が出土するものもあります(写真)。また、井戸は掘立柱建物の周辺に位置するようです。

中世の遺物は珠洲焼が多いのですが、小さな破片ばかりで、形になるものは多くありません。今後、掘立柱建物跡と出土遺物を十分検討することが課題になります。  
(山崎忠良)



井戸から出土した木製品



掘立柱建物跡の柱根

## 「青田遺跡出土品展」開催のご案内

～ 常設展示も新資料を追加しました ～

平成11～13年度に本格的な発掘調査が行われた加治川村の青田遺跡は、縄文時代晩期（今から約2,500年前）に営まれた集落跡であったことが判明し、様々な有機質遺物が発見されたことで全国的に注目された遺跡です。埋蔵文化財センターの展示室では、保存処理のために3月のシンポジウムでは公開できなかった壁材や簾状木製品を中心に、青田遺跡出土品展を11月上旬から開催いたします。縄文時代晩期の土器・石器類のほか、建築部材（柱根・壁材）・櫂・笠状編み物・籠・漆製品など青田縄文人の暮らしを物語る資料を多数展示いたしますので、この機会に是非ご来館ください。

また、これに伴い、旧石器時代から江戸時代までを解説した常設展示コーナーも新たに発掘された資料を加えました。この秋、リニューアルした展示室で、にいがたの歴史を満喫してみませんか。



新たに展示される壁材（青田遺跡）

## 出前授業だより ～ 新潟市立新通小学校での実践から ～

当事業団では、普及啓発活動の一環として、要請があった学校に職員を派遣する出前授業を行なっています。今年度で3年目を迎えますが、今年最初の出前授業が、去る9月13日に新潟市立新通小学校で実施されました。今回は、PTA主催の参観授業で保護者の方々も参加されたこと、新潟市埋蔵文化財センターとの共同事業として実施したこと、児童・保護者合わせて200名を超える人数が対象であったことなど、今までの出前授業とはかなり異なった内容で行われました。当日は、火おこしと土器での煮炊はグラウンドで、石器体験と遺物の観察は体育館で実施しました。小雨もぱらつく天候でしたが、約3時間に渡って子供たちの元気な声が響き、親子で協力して実習に取り組む様子もいたる所で見受けられました。事前の綿密な打ち合わせが必要になるなど、準備に多少時間はかかりますが、今後の出前授業の新たな展開例といえるのではないのでしょうか。



キリモミ式の  
火おこしに挑戦



間近で遺物の  
実物を観察  
(新潟市内の遺跡)  
(出土品を展示)

石器の切れ味  
を実感

縄文土器での  
煮炊実習





## 報告書作成中の遺跡

### まるやま 円山遺跡

円山遺跡は北蒲原郡安田町大字六野瀬字円山にある遺跡です。北陸自動車道建設の土取り工事に伴い、1995年に発掘調査が行われました。

遺跡は笹神丘陵の南端にあり、遺跡の南約800mには阿賀野川が流れています。

調査では後期旧石器時代から縄文時代後期までの遺物が出土しました。注目されるのは後期旧石器時代の石器です。石器の集中する地点は、3ヶ所認められました。このうち2つの集中地点からは珪質頁岩製のナイフ形石器・彫刻刀形石器・搔器などが出土しました。ナイフ形石器は大形の石刃（縦長の剥片）の根元に加工を加えた東山型ナイフ形石器といわれるもので、東北地方に多く見られるものです。

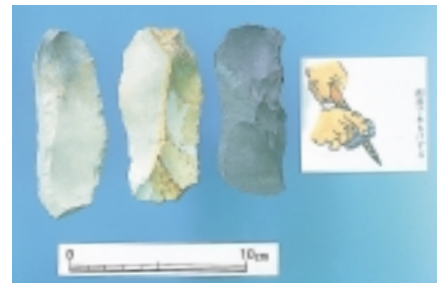
接合作業の結果、2つの集中地点の石器が何点か互いに接合することがわかりました。接合作業とは、石器を割られる前の状態に戻す作業です。石器は材料となる石を打ち割って作るため、1つの石から作られた石器や石屑を集めてつなぎあわせれば、もとの割られる前の石の形に戻すことができます。ただし、円山遺跡の場合は、ほとんど接合しない状況ですので、遺跡に原石を持ち込んで、石器をさかんに作っていたとは考えられません。円山遺跡の石器の材料となっていた良質な珪質頁岩は、現在のところ遺跡の近くでは見つかっておらず、遠く東北地方までいかなければ手に入れることができません。これらのことから、円山遺跡に来た旧石器時代人は遠くから重い原石を運ばず、使う直前の石器を持ち歩き、使うときに刃を作り出して使っていた様子を知ることができます。



ナイフ形石器



搔器



削器

### せきかわやち 関川谷内遺跡B地点

関川谷内遺跡B地点は中頸城郡妙高高原町大字関川字谷内にある遺跡です。上信越自動車道建設に伴い、1994年に発掘調査が行われました。

調査の結果、縄文時代・古墳時代・平安時代の遺構・遺物が見つかりました。このうち主体となるのは縄文時代です。縄文時代の遺物には、早期前半と早期末から前期初頭の時期があります。石器では石鏃の作りかけのものがまとまって出土しました。隣接する関川谷内遺跡A地点・大堀遺跡・中ノ沢遺跡と遺跡の形成時期はほぼ同じですが、それぞれ少しずつ時期差がみられます。遺跡の整理が進む中で、当地の人の動きがまたひとつ明らかになると思われます。

(土橋由理子)



作りかけの石鏃



古墳時代の土器出土状況

連載企画・にいがたの文字資料から

## 第2回 - 漆紙文書 -

前は木簡が紙 = 文書の代用品であることを述べました。1,000年以上昔の古代文書が残ることは非常に稀なことで、現存するほとんどが奈良の東大寺正倉院にしか残っていません。今回は残ることが稀な古代文書が、偶然土の中で残り、「地中の正倉院文書」といわれる漆紙文書について記したいと思います。

新潟県に限らず日本の土壌は酸性が強い上に、土の中に埋まると地中の細菌などによって、大半のものは分解され腐敗してしまいます。多くの発掘調査で木や骨などが見られず土器しか出土しないのはそのためです。しかし、木のまわりが水分などで密封され、酸素が絶たれて細菌が活動・分解できずに保存されることがあり、木簡はその一例といえます。漆紙文書はそうではなく、牛乳の紙パックの内側が薄いビニールで覆われているように、文書のまわりを漆が被い内側の紙を保護したため、細菌によって腐ることなく古代の文書が残っているのです。

新潟県は現在でも有数の漆の産地で、縄文時代から上手に漆を利用してきました。写真 は漆の蓋紙に使われた文書が土器と一緒に捨てられたものです。土器にのせたまま廃棄された漆紙文書は東北では数例出土例がありますが、県内では数少ないものです。



写真 土器に残った漆紙文書  
(写真提供:新発田市教育委員会)

実際に文書が解読されたのが、和島村門新遺跡出土の漆紙文書です(写真)。こちらは何枚かの紙を一緒に折り畳んで捨てたため、漆紙の塊となって出土しました。固まった漆紙文書を慎重に開き赤外線カメラで漆の中にある文字を解読すると色々なことが分かりました。貴重な紙は役所のような場所でしか使えないため、漆紙文書になる紙は不要となった公文書などがよく利用されています。しかし、和島村の漆紙文書は公文書で用いられるようなきちんとした楷書で書かれているのではなく、ややくずされた行書のような書体で記されています。特に「大刀一腰」の「腰」の字は古代の公文書ではほとんど使われない特殊な書体であることが分ります。この「腰」は、漢字のツクリである「要」を上書き、ヘンに当る「月」を下に記しているのです。つまり、本来は左右に並んで書かれるパーツをわざわざ上下に記しているのです。このような堅くない文字

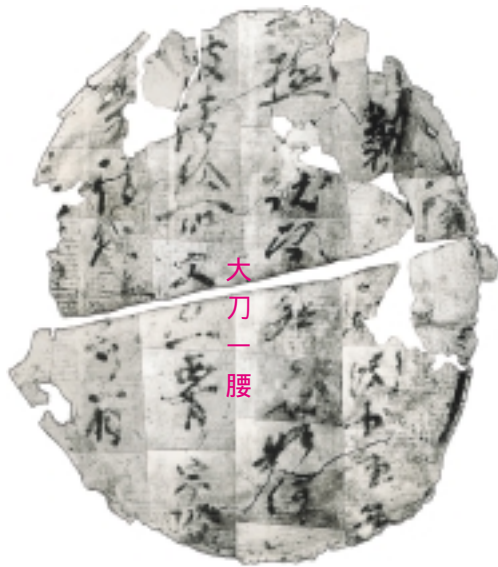


写真 門新遺跡出土の第4号漆紙文書  
(写真提供:和島村教育委員会)

や書体によって漆紙文書にしては珍しく、公文書以外の普通の書状(手紙)が再利用されていることが分かります。また、塊となって一緒に入っていた他の文書には「延長六年十月」(西暦928年)と記され(写真)、現在出土した漆紙文書の中では最も時代の新しいものであることも分かっています。

新潟以上の漆産地である東北では、1,000年以上前の徴税台帳(計帳)が残り、行を分けるための界線が記されているものや紙と紙を貼り合せた部分が残るもの、黒ではなく朱の赤い墨が残るものなど様々な古代文書が漆紙となって見られます。漆紙文書が東日本で数多く出土するのは、漆の生産との関係も考えられ、「漆の国」新潟県の歴史を考える上で、重要な資料といえるのではないのでしょうか。



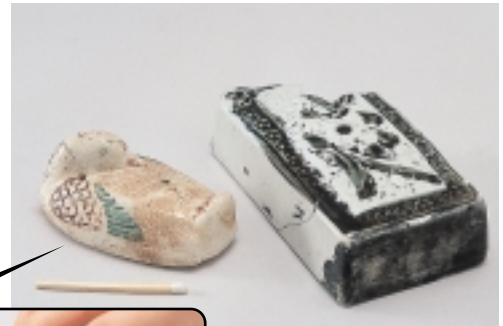
写真 門新遺跡出土の  
第1号漆紙文書

(田中一穂) (写真提供:和島村教育委員会)

## 埋文コラム「発掘から見てきた文房具の歴史」後編

### すいてき 水滴

墨を磨る際に、硯に水を注ぐ容器で、形にもかなり凝っていたようです。上越市木田遺跡（平安、中世、近世）の近世の溝からは、色絵の水鳥形水滴が出土しています。写真でみるように、掌に収まる程の大きさで可愛い姿をしています。また、豊栄市正尺A遺跡（古墳・平安・江戸）からは近世の長方形型的水滴が出土しています。上面には菊花文が浮き出るように形押し、その上から文様を描いています。釉が掛かっていない部分や、内面には墨の痕が残っており、使用時の様子がうかがえます。どちらも、小さな穴を2つ備え、水を注ぐ量を微調整できるようになっており、使い勝手もよさそうです。



近世の水  
滴  
(左:木田遺跡 右:正尺A遺跡)

水滴の使用方法



### こがたな 小刀

木札に文字を書いた木簡は、用件伝達や日々の記録、荷札の他、役人の手習いや落書きなどに幅広く用いられており、親しみを感じるようなものもあります。貴重な紙にくらべ、小刀で板の表面を何度も削って利用できたので、文字の訂正やりサイクルも容易にすることができました。小刀は、現在のいわば消しゴムといったところでしょう。役人は、筆、墨とともに小刀を携帯し、「刀筆吏」と呼ばれていました。その小刀と思われる刀子が、柏崎市箕輪遺跡（平安時代中ごろ）から出土しています。現在、刀子の刃の部分は錆で覆われていますが、当時は切れ味も鋭く、輝きを放っていたことでしょう。

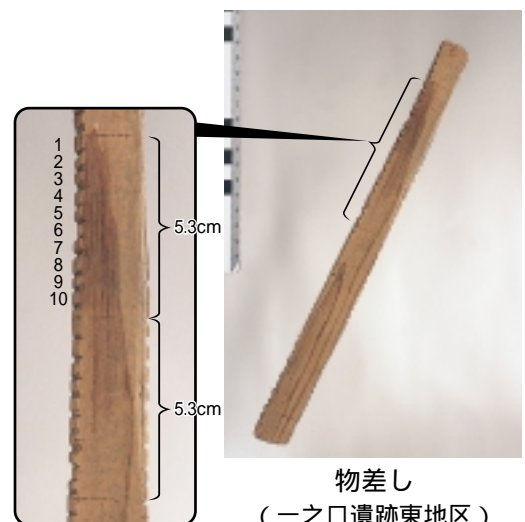


小刀（箕輪遺跡）

### ものさ 物差し

長さを測る用具として、扁平な細板に線を刻み、または墨線などで目盛りを打って使用していました。牙・銅・木製などが出土しており、時期によって尺の伸縮があるので、単位を知る上で重要な資料になっています。上越市一之口遺跡東地区（古墳・平安）から平安時代の木製（スギ材）物差しが出土しています。材の両側面に刻みがあり、さらに10刻みで1単位となるよう刻線によって区画されています。各単位の長さは4～5.7cmと一定しません。使用目的に合わせて目盛りを打つこともあり、また常用のものと一次使用のための簡易的に作ったものには精粗の差があります。この物差しはどのような用途に使用していたのでしょうか。

（今野明子）



物差し  
(一之口遺跡東地区)

拡大写真

### 引用・参考文献

- 「木簡は語る 歴史発掘」講談社 金子裕之 1985
- 「正倉院宝物と平安時代 - 和風化への道 -」淡交社 米田雄介 2000
- 「木器集成図録 近畿古代篇」奈良国立文化財研究所 史料第27冊 1985



## 県内の遺跡・遺物 38

おうみじんじゃけいだいきょうづか  
**青海神社境内経塚出土品**（昭和37年 県指定）

遺物出土地：加茂市大字加茂229番地

青海神社は、加茂市街地の南にある加茂山の中腹に位置しています。本殿は、もとは境内の別の場所にあったと伝えられていますが、宝暦7年（1757）新発田藩主溝口直温の命によって、本殿を現在地に造営するために新たに山を削平したところ、多数の経塚が発見されました。遺物は十数口の経筒や経筒の外容器が出土したといわれていますが、現在は二口の銅製経筒と一口の陶製四耳壺が伝えられています。

その内の一口の経筒は鑄銅製、蓋は被せ蓋式で宝珠鈕を付け、筒身は円筒形で、「倉持宗吉、菅原氏、治承二年六月廿四日」の銘文が刻まれています。銘文にある治承二年（1178）は、平家滅亡の7年前にあたっています。他の一口の経筒は銅板製で、蓋は被せ蓋式の平蓋です。陶製壺は珠洲焼で頸部を欠失していますが、経筒の外容器とみられ、紫がかった褐色を呈し、肩部の四耳の下には波状文を施しています。いずれも入念な作りの優品であり、平安時代末期の経塚の内容を知る上でも貴重な考古資料といえます。

菅原氏倉持宗吉が埋納したこの経筒は、当時、江戸でも高く評価され、寛政年中には松平定信が画家の谷文晁にこの経筒を模写させ、その著「集古十種」（註1）の銅器の部に収録しているほどです。また、明治11年に明治天皇が北陸御巡幸を行なった際、青海神社神主宅に宿泊した右大臣岩倉具視の指示により、当時の社司古川良策が経筒を三条あんざいしよの行在所（註2）に持参して、明治天皇の覽に供しています。

註1：松平定信が編纂した古書画・古器物・古武具等の木版図集

註2：天皇が行幸を行なった際の住まい



青海神社境内経塚出土の遺物：右から銅鑄製経筒（治承二年銘）、銅板製経筒、陶製四耳壺  
 （写真提供：加茂市教育委員会 写真掲載許可：青海神社）

埋文にいがたNo.40

発行（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新津市金津93番地1 e-mail:maibun@coral.ocn.ne.jp

TEL (0250) 25-3981 FAX (0250) 25-3986

印刷 新高速印刷（株）